

その他の望診

爪

(総論)

- 1、爪は指先を保護し、体重を支え、立ったり歩いたり、物を掴んだり触ったりするときに必要な組織器官である。
- 2、手の爪は1日0.1ミリ、足の爪は1日0.05ミリ成長し、生えかわりに手の指で半年から1年、足の指ではその倍かかる。若年層では成長が早く、高齢者は遅いが、一生、成長する。
- 3、爪の主成分はケラチン(タンパク質の一種)である。
- 4、①爪の露出している部分を「爪甲」(そうこう)、皮膚に隠れている部分を「爪根」(そうこん)という。
②爪根には「爪母基」(そうぼき)という部分があり、リンパ管や血管が通っていて新しい爪はここで作られる。したがって爪母が傷つくと凸凹の爪になる。
③爪と接触し爪甲を乗せている皮膚を「爪床」(そうしょう)と呼ぶ。「爪床」は爪甲の形成と維持に必要な水分や栄養を供給するため毛細血管が通っている。
④爪甲の両側を囲んでいる指の皮膚を「爪郭」(そうかく)という。爪根を覆っている皮膚を「後爪郭」(こうそうかく)という。
⑤「後爪郭」(こうそうかく)の部分からわずかに爪甲を覆う半透明の皮膚角質を「爪上皮」(そうじょうひ)といい、普通、「甘皮」(あまかわ)と呼ぶ。
⑥爪の根本部分には乳白色の半月形状の部分が見られ、これを爪半月(そうはんげつ)という。これは角化していない新しい爪である。
⑦爪の先端は皮膚から離れており、これを「爪先」もしくは「爪甲遊離縁」という。
⑧爪床と爪先の境界線に見られる幅0.5~1.5mmの帯状の部分を「黄線」といい、爪甲が爪床から離れないようにしている部分である。
⑨横線が両端に接する部分を負荷点という。負荷がかかりやすいため、ここを起点として爪が割れたりささくれになったりすることが多い。
⑩爪甲が作られる根本の部分で後爪郭に覆われていて外からは見えない爪甲の根本の部分を「爪根」という。
⑪爪甲を剥がすと爪甲があった部分の根本と両側縁に溝があり、これを「爪溝」という。両側縁の「爪溝」(側爪溝)は浅く、根本の「爪溝」(後爪溝)は深い。側爪溝は爪の通り道、後爪溝は爪根を袋状に包んでいる。
- 5、爪半月より先の爪甲は薄い肉色で、これは爪床内の血管が爪に透けて見えるためで、押すと色が抜ける。

I、『中医診断学』(広東中医学院主編 上海科学技術出版社 1964年刊)

指甲は筋の余りであり、肝胆の外候である。正常な指甲は紅潤で、気血の充足を表している。

深紅色は気分に熱があり、淡白は臓気虚寒、蒼白は血虚、黄色は黄疸、黒色は血瘀あるいは血凝死証である。指甲を押すと白色に変わり、手を放すと紅色に回復するのは気血が流暢に流れている徴候であり、放してもすぐには回復しないのは血虧(欠)である。

Ⅱ、『實用中医診断学』(鄭鉄濤主編 上海科学技術出版社 1988 年刊)

爪甲は筋の余りである。正常な爪甲は色が紅潤で、適度な厚さがある。

- ①淡白色の爪甲は虚証を示す。
- ②鮮紅色や深紅色の爪甲は熱証。
- ③黄色の爪甲は黄疸証
- ④手足の爪甲が青紫色で黒味を帯びるのは危険で重証
- ⑤爪甲を押すと白色になるが、放すとすぐに赤みを帯びるのは、気血の流れが流暢で病が比較的軽いことを示しているが、手を放してもすぐには赤みが戻らないのは、気血が滞っていて病が比較的重いことを示している。
- ⑥爪甲が薄くて脆いのは肝血不足。
- ⑦爪甲上に針の大きさや米粒大の白斑がみられるのは多く虫積である。

Ⅲ、『中医診断学』(鄭鉄濤主編 人民衛生出版社 1987 年刊)—抜粋

爪甲の望診

(一) 概論

爪甲とは手と足の両方の爪甲を指す。爪甲の望診とは爪甲の形状と色沢を観察することで診断する望診の一つである。『望診遵経・爪甲望法提綱』(清代 1875 年 汪宏)は『内経』の理論に基づいて、「爪は筋の余り、胆の外候、胆は爪に应じている」と指摘した。爪はまた肝に应じており、爪は五華では肝の華であり、内は筋に対応している。肝胆は人体の気血とも関連している。したがって爪甲を望診すると肝胆の状態が候えるだけでなく、全身の気血の盛衰、邪気の性質と深さも診察することができる。また営衛の循行は一刻たりとも止まらないので、爪の生長の動態観察によって臓腑気血の盛衰を理解することができる。

爪甲の望診は『黄帝内経』をその起源とするが、後世であまり発展せず、『四診抉微』(清代 1723 年 林之瀚)、『形色外診簡摩』(清代 1894 年 周学海)、『望診遵経』(清代 1875 年 汪宏)などに爪甲に関する専門的な記載がみられるぐらいである。

(二) 爪甲望診の一般的方法

自然光の下で手掌を下に向けて軽く広げ、爪甲を上向けにして 30 センチぐらい離れたところから観察する。

観察箇所は、1、爪甲、2、爪床、3、爪半月、4、後爪郭

1、爪甲(中国語：甲体、甲板)—爪甲の透明さ、大きさ、彎曲の程度、扁平や凹凸、厚さ、縦筋、虫喰いのように欠損しているかなどの形状の変化、さらには爪甲の質が澄んでいるのか濁っているのか、強靱か脆いか、肌理が緻密か粗いか、及び色沢の濃さ、艶があるかどうか

か、薬物に染色しているかなどに注意する。

2、爪床(中国語：甲床)—爪床とは爪甲下の軟肉と孫絡のことである。その色沢、斑紋の有無、瘀点などに注意する。さらに孫絡の血流動態を観察する。

3、爪半月(中国語：月痕)—爪根(爪甲の根本部分)で「後爪郭」(こうそうかく)の近くにみえる新月形の白色部分が爪根を横に貫いている。これを爪半月という。爪半月の有無、色沢に留意する。

4、後爪郭(中国語：甲皺)—爪根(爪甲の根本部分)と手指の皮膚が接している境の部分で皮膚に属すが爪甲の生長と密接な関係があるので、爪甲望診の内容の一つになっている。形、色、動態の変化、爪甲との結合がきちんとできているかなどに注意する。

(三)爪甲の色沢が示す病変

『形色外診簡摩・診爪甲法』では、「爪下の血色の診法は面色と同じである。爪甲を圧しても散らない、あるいは散ってもなかなか元に戻らないのは血死の徴候である。」としている。一般に血色の回復が緩慢なのは気滯あるいは血瘀、紅色に戻らないのは多く血虧(欠)、散らないのは瘀血である。

①白色—指の爪甲が軟らかく萎び光った白さ(原文：指甲軟萎晄※白)で、これを圧すると白くて艶が無くなるのは元気の欠損で肝血が不足するからである。『望診遵経・爪甲望法提綱』では「爪甲の白は寒証」とする。一般に蒼白は虚寒で多く脾腎陽衰、淡白は血虚あるいは気血両虚。『脈経』(魏晋代3世紀頃 王叔和)では「爪甲の白は不治」とする。

②黒色—『脈経・扁鵲華佗察声色要訣』では、病人の手足の爪甲の下肉が黒いのは八日で死ぬとしている。『望診遵経・爪甲望法提綱』では、「爪甲の黒は血瘀による痛みか、あるいは血凝による死である。要するに潤であれば吉であるが乾燥していれば凶である。爪の色は様々あっても、その変化は全てここに集約される」とする。小児の爪甲が青黒く弱弱しい声になったら(原文：忽作雅声者)、肝絶である。久病で爪甲が黒くなったら腎気の絶。外傷による圧迫で黒くなったのは、瘀血で間違いないので、死証では決してない。爪甲が黒くて四肢が冷たく乾嘔して顔面が青いのは凶証。

③青色—多く寒証。『形色外診簡摩・診爪甲法』は、「爪甲の青は厥である」とする。『望診遵経・爪甲望法提綱』では、爪甲の青は多く凶とする。『脈経・診五臓六腑気絶証候』には、「病人の筋が絶すると九日で死す。何をもってそれを知るのか、手足の爪が青く絶え間なく罵っているからである。(一説に八日死)」と記されている。『形色外診簡摩』では、指が細くなる(原文：逕指)のは肝絶とする。『四診抉微・診爪甲』では『脈経』を引用して、「病人の爪甲が青いのは死」としている。実証で藍色の爪甲は多く瘀血か心血瘀阻あるいは肝経が邪気を受けたことによる。虚証の場合の藍色あるいは青紫色は多く悪候に属す。爪甲の青紫は多くの場合、邪熱が重篤で気血が鬱滞したことを示す。

④赤色—爪甲が赤いのは多く熱証。一般には気分に熱があることを示すが、鮮紅色は血分の熱。絳あるいは紅紫は風熱毒盛で心経を邪が犯したか痺証※、歷節風※など。絳紫、あるいは紫紺は気が塞がって血瘀になったか心陰欠損、あるいは死血瘀滞で久痺証に見られる。

⑤黄色—爪甲が黄色いのは多く黄疸。湿熱が熏蒸したからで、肝胆の病証である。鮮明な

黄色は熱証に属し、くすんだ黄色は多く悪候である。

※晄—この漢字は諸橋の大漢和にも『康熙字典』にも出てこない。内山恵子著『中医診断学ノート』（東洋学術出版社 1988 年刊）では、初出の「望診 2 顔色」のところで、「晄白：白くて輝きがある」と付注している。

※痺証—「痺」とは塞がって通じないの意。風・寒・湿・熱などの邪気が人体の肌表・経絡・関節などを侵して、気血の運行が流暢でないか不通になるために、筋肉・筋骨・関節のだるい痛み・痺れ・重だるさ・運動制限・腫脹などの症状を現す病症である。

※歴節風—『諸病源候論』出、「歴節風之状、短気自汗出、歴節疼痛不可忍、屈伸不得是也」。関節リウマチ、関節炎の類。

(四)爪甲の形態

1、爪枯※—『素問』痿論篇では、「肝熱は色(顔色)が蒼く爪が枯れる」、『望診遵経・爪甲望法提綱』では「痺病で骨が痛く爪が枯れる場合は足少陽の血気がどちらも少ないことによる」、また『素問』五蔵生成篇では「辛いものを多食すると筋急(筋肉が引きつる)して爪が枯れる」としている。しかしいずれの場合も爪枯は凶候である。爪甲が魚の鱗のように枯れてしまう「魚鱗甲」というのは、腎気の衰竭あるいは脾失健運で気化が行われず水液が滞留して陰精が行きわたらないことによる。『靈樞』経脈篇では「手太陰の気が絶すると爪が枯れる」としている。

※爪枯：手や足の爪が乾燥すること。爪が干からびて光沢が無くなりみずみずしさを失うこと。現代医学では、「爪乾癬」などをその原因に挙げている。

2、爪萎—生まれたばかりの虫の翅のように萎縮した爪甲である。多く心陰虚損、血行障害、あるいは癘風大毒(ハンセン氏病の類)である。

3、脱落—手や足の爪が自然に脱落してしまうもので、癰疽(ひょう疽)、蛇疔※(?), 脱疽※、癘風※による。『諸病源候論・代指候』※では、「代指はその指の先が腫れ、キンキンと熱をもって痛く、皮膚の色は鮮紅で、爪甲の縁にそって膿がたまり、重症では爪甲が脱落してしまう。代指は別名代甲、槽指など。・・・筋骨間の熱毒が熾盛となり、気機が渋滞し不通となって腫れ膿を持ち、爪甲が脱落してしまう。」と記している。『四診抉微・診爪甲』では、爪甲の脱落は筋絶とする。脱落して再び生じない場合は多く命門火衰による。

※蛇疔(だちょう)：『中医大辞典』、『中医証病名大辞典』などに出てないので不明。蛇頭疔、蛇眼疔、蛇背疔の類か？

※脱疽(だつそ)：脱疽、壊疽

※『諸病源候論』(しよびょうげんこうろん)：隋代 610 年 巢元方

※癘風(れいふう)：ハンセン病

4、軟薄—生理的な軟らかさや薄さは強靱さが保たれている。病態の軟薄はその保護機能が失われた状態である。多く気弱血虧(き 欠の意)、血行障害で陰精が行きわたらず爪甲が養われなくなることによる。あるいは癘風※、久痺を患うことによって起こる。

5、粗厚—手や足の爪の先端や側縁が次第に厚くなっていき、爪甲の表面の光沢が無くなり、爪質が粗くて厚くなり、脆くて枯槁(干からびる)してしまう。粉状の虫食いや欠損が起こり、爪甲の下面には汚い黄色斑がみられる。多くの場合、指の股が湿気ている。『外科証治全書・巻三』※では驚爪風※と言っているが、²、「油灰指甲」のことであり、「甲癬」※(爪

白癬)の患者に見られる。多くの場合、気虚血燥の所に風を受けて爪甲が栄養を失い、厚く枯れたものである。あるいは水湿が浸漬したか湿毒が外侵して気血を阻遏(気血の流れを妨げて止める)ことで起こる。

※『外科証治全書』(げかしょうちぜんしょ)：(清代 1831 年 許克昌)

※鷺爪風(がそうふう)：甲癬と同じ。

※甲癬(こうせん)：爪白癬、爪甲の真菌症など

6、剥離—爪甲と爪床が筍の皮のように次第に分離するので「竹筍甲」※と呼ばれる。はじめは爪先の皮膚から爪甲が遊離する縁の所で白い空洞がみられるが、次第に爪甲の根本に向かって広がっていく。灰白色を呈し、光沢が無く、軟らかく薄くなる。手指に多く発生し、1本の爪甲もしくは複数の爪甲で起こる。多くの場合、失血過多、営血欠損、あるいは素体の肝血不足、肝経血燥、気血不済、陰陽失調、気機不暢によって爪甲が栄養さを失うことによる。外傷や甲癬※に多く見られる。

※竹筍甲(ちくじゅんこう)：爪甲剥離症

7、脆裂—爪甲が堅くなく、強靱さが失われて断裂しやすく、同時に層状に分離する。多くの場合、血行障害あるいは血虚風燥によって爪甲が栄養さを失い、脆弱になって裂けやすくなる。外傷や甲癬※に見られる。

8、鉤状—爪甲が尖端に向かって屈曲して中間は山型に隆起し、甚だしい場合は鷹の爪のような形になる。「鷹爪甲」※あるいは「鷹爪風」と呼ぶ。爪甲の表面はごつごつし、黒色、灰黒色あるいは黒緑色を呈し、不透明で光沢が無い。外傷が誘因になっていることが多く、あるいは先天の稟賦に属しているものであるが、いずれにしろ気鬱血瘀で絡脈が阻滞し、爪甲が濡養されないことによる。風痺※、筋攣※の場合に常見される。

※鷹爪甲(ようそうこう)：鷺爪

※風痺(ふうひ)：行痺と同義。痺証の一種。風邪が湿邪や寒邪を伴って人体に侵入、筋肉や関節の気血を阻害するために起こる痺証。(『素問』痺論出)

※筋攣(きんれん)：症状名。肢体の筋脈が痙攣収縮して自在に伸びない状態。(『靈樞』刺節真邪出)

9、匙形—爪甲が薄く軟らかくなって、周辺は巻き上がり中央は陥没して匙形を呈するもので、「匙形甲」、あるいは「反甲」と言う。手指に多く、足指の爪甲では少ない。原因の多くは気虚血欠や肝血不足、あるいは脾失健運による栄養不足で爪甲が養われないことによる。大病の後や脾胃が素から虚して身体が痩せている、あるいは癥瘕※積聚※や久痺証の人に見られる。

※匙形甲(しけいこう)：匙状爪、スプーンネイル

※癥瘕(しょうか)：腹部に硬結が出現し、脹満・疼痛を起こすなどの症状を呈する病証(『金匱要略』出)

※積聚(せきしゅう、しゃくじゅ)：腹内に結塊が生じ、患部が痛んだり脹ったりする病証を指す。(『靈樞』五變篇出)

10、扁平—爪甲が次第に扁平に変わり、表面がデコボコし、筋目がテニスのラケット状に交叉する。遠端は平らに広がり、指節は短くなり、爪の溝が腫れる。多く嬰幼兒の指しゃぶりに見られ、気血が順調に循行できず指や爪甲が十分に養われなくなることによる。

11、嵯棱—根本から遠端に向けて爪甲に縦筋が何本も走る。多く平行に縦筋が走り、縦溝が形成され、表面がデコボコして平らでなくなる。多く腎陰不足、肝陽上亢あるいは気血

両虧(き 欠の意)や爪甲の損傷で陰陽が失調し気血不和となって起こる。

※峭稜(せきりょう)：現代医学では爪甲縦条という。加齢とともに多く見られるようになるが、問題にはしない。

12、横溝※—爪甲に陥没した横溝が何個か現れ、表面がデコボコして平らでなくなる。多く邪熱肺燥で気津が行きわたらない(気津不布)、肝気鬱結、あるいは気虚血瘀で爪甲が養われなくなることによる。

※横溝(おうこう)：現代医学では波板状爪(洗濯板状爪)という。一番多いのは他の指で後爪郭部を後に押す癖で親指に多く見られる。全ての爪に一本だけ横筋が現れるのはボー線状といい、過去に発疹などの全身の病変が起こったことを示す。爪の根本の後爪郭部が赤く腫れて爪の表面がでこぼこしてくるのは慢性爪郭炎。

13、扭曲※—手の爪甲がねじれて変形し、光沢を失う。多く肝気虚、あるいは血が筋を榮させず爪甲が榮えることができなくなったことによる。

※扭曲(じゅうきょく)：爪甲鉤彎症に類似する。

14、筒状※—爪が筒のように曲がる。「葱管甲」とも言う。久病体虚、安逸少労の人に多く見られる。爪を圧迫すると蒼白になり、放しても白いままなのは、多く血虚気弱である。

※筒状(とうじょう)：巻き爪。一般的には爪真菌症、乾癬、爪の腫瘍、足に合わない靴、全身性エリテマトーデス、川崎病、末期腎不全、一部の遺伝などで見られる。

15、球形※—指の爪甲が横に広がり、指先に向かって彎曲して球面を呈する。指先がニンニクのように大きくなるので「蒜頭甲」と呼ばれる。気虚血瘀で起こることが多い。爪甲を圧迫すると糸状の細絡が浮かびあがるのは、多く気機が鬱窒して血行が瘀阻したことによる。咳喘、痰飲、肺痿、労瘵、心陽虚衰の胸痺および肝鬱による癥瘕積聚などに常見される。

※球形：ばち状指。心臓や肺疾患で起こることが多い。

16、啃欠※—小児が爪の縁を齧ることで爪が欠損する。多くの場合、疳積、虫積である。

※啃欠(しゅうけつ)：啃はかじる、かじり取る意、爪咬症、爪嚙み症

17、甲下贅疣※—爪の下に疣(イボ)ができ、爪甲を持ち上げている。疣が軟らかい場合は血瘀、堅い場合は骨疣であるが、いずれも気血の瘀滞で起こる。

※甲下贅疣(こうかぜいゆう)：爪甲下の疣贅

18、点状や線状の紋—爪甲の下に各形の斑点がみられるもので、白色は気虚、黄赤色は熱、青色は痛、紫絳は心血瘀阻である。まばらで薄い斑点が混じっているのは疳積、虫積で、「蛙蝕爪(虫食い爪)」とも言われる。『几種中医簡易診断法』※によると児童の爪甲の中心に辺縁が整っていない白色の雲斑が見えるのは多く回虫であり、斑が大きく色が濃いのは虫が多いことを示している。母指や示指の爪甲に針大の円形の白斑がみられ、赤白混じっている「花甲」も回虫である。爪の溝が糜爛しているのも虫積で脾を傷ったことによる。爪に扁平、反り爪、亀裂が現れたら鉤虫(十二指腸虫)である。

爪甲を圧迫しても白くならない瘀血の斑点は傷によることが多い。暗紅色は 3~5 か月に軽い傷を負ったもので邪は気分にあり、予後は良好である。青紫色は半年から 2 年以内に受傷したもので、比較的重く予後は良くなく、邪が営分にある。あるいは受傷してから時間が経ってない場合は傷が重くても予後は良好である。黒色は 2~5 年以内に受傷し傷がかなり

重く、邪が血分にあつて予後が劣る。黄色は傷が5年以上あるいは時間は短くても傷が極めて重く、気血両傷で予後は多くの場合、不良である。点状は鈍器による傷、線状は切り裂かれた傷か棍棒によるもの、面状は圧迫傷が多い。

爪甲を東西南北と中央の五方位に分け、斑点の出現した部位で受傷した部位を推測できる。例えば母指は頭部、示指は膈以上、中指の臍以上、薬指は恥骨以上、小指は恥骨結合、東方は左側、西方は右側、南方は下、北方は上である。※

※爪甲で全身を診察する法は、『指甲診病』（王文華、李捷珈著 上海中医学院出版社 1990 年刊）に詳しく書かれている。

※『几種中医簡易診斷法』：不明

19、手足逆臚※—爪郭の皮膚が剥がれてしまうもので、俗に「倒槍刺」と言う。『諸病源候論・手足逆臚候』では「手足爪甲際剥起、謂逆臚、風邪入于腠理、気血不和故也」と記す。

※逆臚(ぎゃくろ)：ささくれ、さかむけ。爪先の皮膚の水分や脂分が失われて乾燥することなどによる。

20、倒甲—現代では「嵌甲」※と呼ぶ。『外科証治全書・卷三』※では「爪甲が突然肉内に食い込んで錐でもまれるな刺痛がある」と説明する。多くは足指で起こり、靴が小さくて圧迫したり、外傷、あるいは甲癬※で爪甲が厚くなったことによる。

※嵌甲(かんこう)： 陥入爪

21、癰螺(羸)爪：爪床が青白く、指腹はしなびて縮んでいるのを「癰羸爪」(へつるいそう)という。俗称は「癰螺痧」(へつらさ)。大吐、大瀉、大汗によって気津がにわかに失われるか、暴病(急病)による亡陰※の重篤な患者で見られ、津液が枯渇し指や爪甲が萎びて縮んでしまったからである。

※亡陰(ぼういん)：陰血、陰液の損傷・消耗によって起こされる病証。高熱、大量の発汗・吐き下し、出血、その他の慢性消耗性疾患に続発する。身体がやせ細り、皮膚が干からびて眼窩は落ち込み、煩躁、昏迷、せん妄などを起こす。本証と亡陽の違いは汗が出るけど身熱や手足の温かさ、口渴、冷たい物を飲みたがる、呼吸が粗い、唇や舌が乾いた赤さ、脈は虚数あるいは細数といった熱の証候が現れること。

IV、『中国医学診法大全』（麻仲学主編 山東科学技術出版社 1999 年刊)—抜粋

爪甲：爪甲は筋の余りであり、肝胆の状況を候うことができる。同時に人身は一体で臟腑は相関しているので、爪甲の望診では単に肝胆の病変を測り知るだけでなく、全身の正邪の盛衰状況も測知できる。正常な指甲は色沢が淡江かつ平滑光潤で、質地が堅硬であり、手で爪甲を圧して放すと血色がすぐに回復する。これは気血が充足し、運行が流暢であることを示している。爪甲の色調、形態、質地に異常な変化が現れた場合は、生体内部に病変が存在していることを示している。

(1) 色沢の変化

①白色：爪甲が蒼白で艶が無く、血色が無いのは気虚、肝血不足、脾腎陽虚、心の気血不足などを示している。

②黒色：烏黒色(真っ黒)の爪甲は瘀血痛、死血内凝を示す。黒色で枯槁の爪甲は多く凶候である。久病の後に黒色の爪甲が生じるのは腎絶の象に属することが多い。爪甲が黒色で四肢厥逆、嘔吐、紫色の顔面を伴う場合は、その病症が危険であることを示している。局部

の外傷で起こった黒爪は、瘀血であっても重要なものではない。

③紅色：紅赤色の爪甲は氣熱や血熱といった熱を示している。紅紫色の爪甲は熱で毒を挟んでいることを示しているが、痺証、歷節風などの病証でも現れることがある。暗紅紫色の爪甲は瘀血を挟んでいることを示している。痰火風熱が胸肺の氣血の流れを阻み、氣血が鬱閉してもこの種の爪甲が見られる。

④黄色：爪甲が柏(黄柏?)汁に染まったように黄色になるのは、多くの場合、湿熱熏蒸によるもので、黄疸に見られる。その色が鮮明であれば順であるが、黒さがあるのは多くの場合、凶である。

⑤青色：青色は多くの場合、寒証であるが、瘀血でもこの爪甲が見られる。病気が長引いて爪が青くなり、手足も青いのは肝絶であり、その病の予後は不良である。

(2) 形状の変化

①扁平反凹(扁平で反り返る)：所謂「反甲」で、肝血不足を示しているが、氣滯血瘀に属することもある。

②干枯萎縮(干からびて萎縮している)：干枯は多く肝熱であるが、心陰不足、肝血欠虚、血運不暢でも認められる。爪甲が枯れて魚の鱗のようになるのは多く腎氣不足であるが、脾失建運で水湿が氾濫しても起こる。癘風大毒※、脱疽※でも常に爪甲の萎縮が見られる。

※癘風大毒(れいふうだいでく)：ハンセン病

※脱疽(だつそ)：壊疽に同じ

③剥離脱落(剥離して抜け落ちる)：爪甲の剥離は多く氣血不足、肝經血燥によるもので、甚だしい場合は脱落してしまう。また、初めに指先が腫れ熱をもって痛み、それに続いて爪甲の周辺が膿を持ち、ひどくなると爪甲が脱落してしまうのを、「代指」、「糟指」という。これは熱毒が壅盛で、氣が渋り通じなくなることによる。癘風※、脱疽※などでも剥離脱落は見られる。

④菲薄脆裂(薄く脆くて裂けやすい)：全て氣血が欠虚し精血がいきわたらないことによるが、癘風、甲癰、久痺でも見られる。

⑤粗糙老厚(粗雑で厚い爪質)：氣虚血燥で風を生じる、あるいは水湿浸漬、湿毒外侵によって起こる。

このほか、爪甲の外形の変化には、鉤状(驚爪)、脊棱(縦筋)、溝槽(横溝があって脆い)、扭曲(爪甲鉤彎症の類)、筒状、球形などがある。これらの変形の原因は全て血虚、精少、氣鬱、瘀血によるが、臨床ではその他の徴候と併せて鑑別すべきである。

【研究伸展】

甲半月の研究では、李氏(雲南中医雑誌 1988—40—1)が次のように報告している。

①甲半月は陰に属し、臟腑の精氣の封蔵の状態を反映している。甲半月と甲床は一白一紅で陰陽をそれぞれ主る。正常な状況では、甲半月は男性の母指では約 3 mm、女性はやや小さく、示指、中指、薬指と次第に少なくなり、小指では全部、隠れてしまう。

②甲半月の露出が大きすぎたり小さすぎたりするのは病態である。一般に甲半月の露出が大きすぎるのは、臟腑陰液の封蔵ができず機能が亢進していることを意味し、陰虚火旺、肝陽

上亢の諸証に多く見られる。

③甲半月の露出が少なすぎる、あるいは全く甲白(甲半月の白さ)が無い場合は、陰寒内盛か陽気不足である。陰が陽を得られないので甲白は小さいか無いのである。

④甲白と臓腑との関係では、母指の甲白は肺に属し、示指は心、中指は脾、薬指は肝、小指は腎に属す。

⑤左右の甲白が対称かどうかと露出の程度によって、五臓の病変を推量することができる。例えば母指の甲白の露出が大きすぎるのは肺陰不足、肺火内熾の証で、咳嗽、少痰、咳血、盗汗などの症状がみられる。

⑥母指の甲白の露出が小さすぎるのは肺気虚で、力の無い咳、息短※、懶言などの症状が見られる。

※気短(きたん)：呼吸が浅く、促迫して力が無い。

※懶言(らんげん)：人と話す意欲が無い。

⑦両手の母指の甲白が不对称なのは、肺絡※不暢で気血が瘀阻していることを示す。咳嗽、胸痛、息短※がいつまでも治らないなどの症状がみられる。

※肺絡(はいらく)：気管や気管支を指す。

V、現代中医診断学書の爪の扱い

現代中医診断書の多くが望診のなかで「爪」に対して、あまり着目していない。書いてあるものも爪の色調までで、形態まで踏み込んでいるものは少ない。

※手持ちの資料で示す

全く触れていない書

『中医診断学』(高等中医薬院校外国進修生教材 広州中医学院主編 中医古籍出版社 1987 年刊)

『中医四診入門』(林鏡棟著 中国中医薬出版社 2012 年刊)

色調を中心に簡単に紹介している書

『中医診断学』(中医臨床参考叢書 広東中医学院主編 上海科学技術出版社 1964 年刊)

『中医診断学』(供中医類専門書 朱文鋒主編 上海科学技術出版社 1995 年刊)

『実用中医診断学』(鄧鉄濤主編 上海科学技術出版社 1988 年刊)

色調だけでなく形態まで書かれている書

『中医診断学』(高等中医院校教学参考叢書 鄧鉄濤主編 人民衛生出版社 1987 年刊)

『中国医学診法大全』(麻仲学主編 山東科学技術出版社 1999 年刊)

VI、参考資料

爪甲を何らかの診断に用いるものとして、『指甲診病』（王文華、李捷珈著 上海中医学院出版社 1990 年刊）、『李学誠指甲診病』（李学誠著 山西出版集团 2011 年刊）、『望甲診病與中医簡易治療』（周幸来主編 人民軍医出版社 2011 年刊）、『望甲診病』（周幸来・毛小君主編 遼寧科学技術出版社 2012 年刊）など、何冊もの書籍が出版されている。これらは写真をふんだんに使ったり図示したりしているが、いずれも、それによって得られた情報を現代医学的診断の一助としており、我々の四診における爪の望診とは異なるものである。その最初の書が『指甲診病』（王文華、李捷珈著 上海中医学院出版社 1990 年刊）である。そこでは手指の爪甲に現れた血気符号(血気の情報)の位置、形態、色調などで内臓や器官の病変や病変の程度を判断しようとしている。各爪甲を縦横 2 等分し、さらにその各エリアを縦横 2 等分して、各爪甲を 16 分割する四分比法、各爪甲を縦横 3 等分し、さらにその各エリアを縦 3 等分して、各爪甲を 81 分割する九分比法が紹介されている。また、血気符号の現わせ方も、爪甲を母指と示指で挟み左右から押したり、上下に押したりなど様々な方法が紹介されている。こうして多種多様な形状や色調の血気符号から、病態を判断しようとするものであるが、前述の如く、現代医学の初期診断的なものである。

望診 爪(附表)

中医診断学書に示された色調と形態一覧

①色調

	五色の詳細	『實用中医診断学』※1	『中医診断学』※2	『中国医学診法大全』※3
紅 色 ・ 赤 色	紅潤・適度な厚さ	正常		
	紅赤色			気熱や血熱といった熱
	鮮紅色	熱証	血分の熱	
	深紅色	熱証		
	赤色		多く熱証	
	絳あるいは紅紫		風熱毒盛で心経を邪が犯す か痺証、歴節風など	毒を挟んだ熱か痺証、歴節風など
	絳紫、あるいは紫紺		気が塞がって血瘀になった か心陰欠損、あるいは死血瘀 滞で久痺証	
	暗紅紫色			瘀血を挟む。痰火風熱が胸肺の気 血の流れを阻み、気血が鬱閉して もこの種の爪甲が見られる。
	爪甲を押しても白 色にならない		瘀血	
白 色	淡白色	虚証	血虚あるいは気血両虚	
	蒼白で艶が無く、 血色が無い			気虚、肝血不足、脾腎陽虚、心の 気血不足など

	爪甲が軟らかく光った白さ、圧すと艶が無い白色		元気の欠損で肝血が不足	
	爪甲を押すと白色になるが放すとすぐに赤みを帯びる	気血の流れが流暢で病が比較的軽いことを示している		
	爪甲を押すと白色になり、放してもすぐには赤みが戻らない	気血が滞っていて病が比較的重いことを示している	気滞あるいは血瘀、紅色に戻らないのは多く血欠	
	蒼白		虚寒で多く脾腎陽衰	
黒色	小児の爪甲が青黒く弱弱しい声になる		肝絶	
	烏黒色(真っ黒)			瘀血痛、死血内凝
	黒色で枯槁			多く凶候
	久病で爪甲が黒くなる		腎気の絶。	腎絶
	外傷圧迫で黒くなる		瘀血であって死証ではない	瘀血であっても重要なものではない。
	爪甲が黒色、四肢厥逆、嘔吐(乾嘔)、青(紫)色の顔色		凶証	その病症は危険
青色	青色		多く寒証	多く寒証。瘀血でもこの爪甲が見られる。病気が長引いて爪が青くなり、手足も青いのは肝絶、その予後は不良
	実証で藍色		多く瘀血か心血瘀阻あるいは肝経が邪気を受ける	
	虚証で藍か青紫色		多く悪候	
	青紫色		多くは邪熱が重篤で気血が鬱滞	
	青紫色で黒味を帯びる	危険で重証		
黄色	黄色	黄疸証	爪甲が黄色いのは多く黄疸。湿熱が熏蒸したからで、肝胆の病証	爪甲が柏(黄柏?)汁に染まったような黄色は、多くの場合、湿熱熏蒸により、黄疸に見られる。その色が鮮明であれば順、黒さがあるのは多くの場合、凶
	鮮明な黄色		熱証に属す	
	くすんだ黄色		多く悪候	

※1『実用中医診断学』鄭鉄濤主編 上海科学技術出版社 1988 年刊

※2『中医診断学』鄭鉄濤主編 人民衛生出版社 1987 年刊

※3『中国医学診法大全』麻仲学主編 山東科学技術出版社 1999 年刊

②形態(『中医診断学』鄭鉄濤主編 人民衛生出版社 1987 年刊に基づく)

形態	別称	状態	病証
	現代表記		
爪枯 そうこ		爪が干からびて光沢が無くなり、みずみずしさを失う	凶候
魚鱗甲 ぎょりんこう		爪甲が魚の鱗のように枯れてしまう	腎気の衰竭または脾失健運で気化されず水液が滞留し陰精が行きわたらない
爪萎 そうい		生まれたばかりの虫の翅のように萎縮した爪甲	多く心陰虚損、血行障害、または癘風大毒(ハンセン氏病の類)
脱落 (だつらく)	代指、代甲、槽指	手や足の爪が自然に脱落してしまう	癰疽(ひょう疽)、蛇疔(?), 脱疽、癘風など。脱落して再び生じない場合は多く命門火衰
軟薄 (なんはく)		生理的な軟らかさや薄さは強靱さが保たれている。	正常
		病態の軟薄はその保護機能が失われた状態である。	多く気弱血虧(き 欠の意)、血行障害で陰精が行きわたらず爪甲が養われない。あるいは癘風、久痺
粗厚 (そこう)	鷲爪風 油灰指甲	手や足の爪の先端や側縁が次第に厚くなり、爪甲の表面の光沢が無くなり、爪質が粗くて厚くなり、脆くて枯槁(干からびる)する。粉状の虫食いや欠損が起こり、爪甲の下面には汚い黄色斑がみられる。多くの場合、指の股が湿気ている。	「甲癬」(爪白癬)による。多くの場合、気虚血燥の所に風を受けて爪甲が栄養を失い、厚く枯れる、あるいは水湿が浸漬したか湿毒が外侵して気血を阻遏(気血の流れを妨げて止める)することで起こる。
剥離 (はくり)	竹笋甲	爪甲と爪床が筍の皮のように次第に分離する。はじめは爪先の皮膚から爪甲が遊離する縁の所で白い空洞がみられるが、次第に爪甲の根本に向かって広がっていく。灰白色を呈し、光沢が無く、軟らかく薄くなる。手指に多く発生し、1本の爪甲もしくは複数の爪甲で起こる。	多くの場合、失血過多、営血欠損、あるいは素体の肝血不足、肝経血燥、気血不済、陰陽失調、気機不暢によって爪甲が栄潤さを失うことによる。外傷や甲癬に多く見られる。
	(現) 爪甲剥離症		
脆裂 (ぜいれつ)		爪甲が堅くなく、強靱さが失われて断裂しやすく、同時に層状に分離する。	多くの場合、血行障害あるいは血虚風燥によって爪甲が栄潤さを失い、脆弱になって裂けやすくなる。外傷や甲癬に見られる。
鉤状 (こうじょう)	鷹爪甲 鷹爪風	爪甲が先端に向かって屈曲して中間は山型に隆起し、甚だしい場合は鷹の	外傷が誘因になっていることが多く、あるいは先天の稟賦に属しているものであるが、いずれ

	(現)鷲爪	爪のような形になる。爪甲の表面はごつごつし、黒色、灰黒色あるいは黒緑色を呈し、不透明で無光沢。	にしろ気鬱血瘀で絡脈が阻滯し、爪甲が濡養されないことによる。風痺、筋攣の場合に常見される。
匙形 (しけい)	匙形甲 反甲	爪甲が薄く軟らかくなって、周辺は巻き上がり中央は陥没して匙形を呈するもの。手指に多く、足指の爪甲では少ない。	多くは気虚血欠や肝血不足、または脾失健運による栄養不足で爪甲が養われないことによる。大病の後や脾胃が素から虚して身体が痩せている、あるいは癥瘕、積聚や久痺証の人に见られる。
	(現) 匙状爪、 スプーン ネイル		
扁平 (へんぺい)		爪甲が次第に扁平に変わり、表面がデコボコし、筋目がテニスのラケット状に交叉する。遠端は平らに広がり、指節は短くなり、爪の溝が腫れる。	多く嬰幼兒の指しゃぶりに見られ、気血が順調に循行できず指や爪甲が充分に養われなくなることによる。
嵴棱 (せきりょう)	(現) 爪甲縦条	根本から遠端に向けて爪甲に縦筋が何本も走る。多く平行に縦筋が走り、縦溝が形成され、表面がデコボコして平らでなくなる。	多く腎陰不足、肝陽上亢あるいは気血兩虧(き欠の意)や爪甲の損傷で陰陽が失調し気血不和となって起こる。
横溝 (おうこう)	(現) 波板状爪 洗濯板状 爪 1 指だけの横筋は ボー線状	爪甲に陥没した横溝が何個か現れ、表面がデコボコして平らでなくなる。	多く邪熱肺燥で気津が行きわたらない(気津不布)、肝気鬱結、あるいは気虚血瘀で爪甲が養われなくなることによる。
扭曲 (じゅうきよく)	(現) 爪甲鉤彎 症に類似	手の爪甲がねじれて変形し、光沢を失う。	多く肝気虚、あるいは血が筋を養わず爪甲が栄えないことによる。
筒状 (とうじょう)	葱管甲	爪が筒のように曲がる。	久病体虚、安逸少労の人に多い。爪を圧迫すると蒼白になり、放しても白いままなのは、多く血虚気弱。
	(現) 巻き爪		
球形 (きゅうけい)	蒜頭甲	指の爪甲が横に広がり、指先に向かって彎曲して球面を呈する。	気虚血瘀で起こることが多い。爪甲を圧迫すると糸状の細絡が浮かびあがるのは、多く気機が鬱窒して血行が瘀阻したことによる。咳喘、痰飲、肺痿、労瘵、心陽虚衰の胸痺および肝鬱による癥瘕積聚などに常見される。
	(現) ばち状指		
啃欠 (しゅうけつ)	(現) 爪咬症 爪噛み症	爪の欠損	小児が爪の縁を齧ることで爪が欠損する。多くの場合、疳積、虫積。
甲下贅疣(こうかぜいゆう)		爪の下に疣(イボ)ができ、爪甲を持ち上げている。	疣が軟らかい場合は血瘀、堅い場合は骨疣であるが、いずれも気血の瘀滞で起こる。

点状や線状の紋		爪甲の下に点状や線状の紋といった各形の斑点がみられる	白色は気虚、黄赤色は熱、青色は痛、紫絳は心血瘀阻。まばらで薄い斑点が混じるのは疳積、虫積で、「蛀蝕爪(虫食い爪)」とも言われる。
		爪甲を圧迫しても白くならない瘀血の斑点	傷によることが多い。暗紅色は3~5か月に軽い傷を負ったもので邪は気分にあり、予後は良好である。青紫色は半年から2年以内に受傷したもので、比較的重く予後は良くなく、邪が営分にある。あるいは受傷してから時間が経ってない場合は傷が重くても予後は良好である。黒色は2~5年以内に受傷し傷がかなり重く、邪が血分にあつて予後が劣る。黄色は傷が5年以上あるいは時間は短くても傷が極めて重く、気血両傷で予後は多くの場合、不良である。点状は鈍器による傷、線状は切り裂かれた傷か棍棒によるもの、面状は圧迫傷が多い。
		爪甲を東西南北と中央の五方位に分け、斑点の出現した部位で受傷した部位を推測できる。	母指は頭部、示指は膈以上、中指の臍以上、薬指は恥骨以上、小指は恥骨結合、東方は左側、西方は右側、南方は下、北方は上。
手足逆臚 (てあしぎゃくろ)	倒槍刺	爪郭の皮膚が剥がれてしまう	爪先の皮膚の水分や脂分が失われて乾燥することなどによる。
	(現) ささくれ さかむけ		
倒甲 (とうこう)	嵌甲	爪甲が突然肉内に食い込んで錐でもまれるな刺痛がある	多くは足指で起こり、靴が小さくて圧迫したり、外傷、あるいは甲癬で爪甲が厚くなったことによる。
	(現) 陥入爪		
癰螺(羸)爪 (へつるいそう)	癰 螺 痧 (へつらさ)	爪床が青白く、指腹はしなびて縮んでいる	大吐、大瀉、大汗によって気津がにわかに失われるか、暴病(急病)による重篤な亡陰で見られ、津液が枯渇し指や爪甲が萎びて縮んでしまったからである。